

Alice との関係を通してみる Henry James の側面

—Henry James の書簡と Alice James の日記を通して—

志 水 智 子

Abstract

Henry James, well educated in a cultured family of America, spent many years in Europe before being naturalized in England. Apart from his native country, he often felt lonely and loved writing letters to his family as he was unmarried all his life. Instead of having a wife, he was surrounded by a lot of friends, his brothers and a sister. He especially loved his sister, Alice, who had mental illness and was unmarried as he was. Henry's letters to Alice as well as *The Diary of Alice James* reveals their relationship as a confidential brother and a sister.

Henry and Alice resemble each other mainly in three points. At first, they lived and died in England though they considered their identity as Americans to be solid. Secondly, they thought of themselves as people of the upper class in English society. Henry almost always depicted upper class characters in his novels except for a few cases, as he and his family remained in the upper class all their lives. Thirdly, both Henry and Alice tended to be onlookers of life. They never adhered to passionate heterosexual human relationships and remained single. Their cool temper as such was reflected in Henry's literary characters.

Henry often adopted Alice's literary expressions in his works and was influenced by her character. While Alice appreciated Henry's calling on her and often enjoyed his company, Henry in turn confided in her for literary advice. They supported each other as beneficent family members all their lives.

序

アメリカ人でありながら、ヨーロッパ経験が豊富で、国際的テーマをその特徴の一つとする作家 Henry James (1843-1916) は、裕福で教養豊かな家庭で生まれ育ったが、生涯独身であり、最終的には祖国アメリカを離れ、イギリスに帰化した。彼の作品においては、結婚や情熱的な人間関係に積極的に関わらない、人生の傍観者のな人物が見受けられ、それは James 自身の人生観と解釈される場合もある。たとえば、James の代表作品の一つである、*The Ambassadors* (1903) における壮年の Strether は、自分が熱意をもって何かに夢中になることがなかった過去を後悔し、さらに遅ればせの結婚の機会をもつかむことはない。Strether は他者の人生の傍観者としてとどまるのみであり、作者 James のヘテロセクシュアルな恋愛観の淡白さと孤独の表象ともとれる。

それでは実際の James の人間関係はというと、結婚こそしなかったが、家族や友人、文学を通じた交流に恵まれた人生を過ごしていたと言える。兄である心理学者で哲学者の William をライバル視することはあったものの、その仕事に大いに影響を受けたことは James 自身の作品における人物たちの精緻な心理描写の手法創出につながった。そして、とりわけ James 家唯一の女の子であった妹 Alice (1848-92) とは気の合う、信頼し合える兄妹であった。Alice James は教育熱心な両親と優秀な兄たちに囲まれたが、女性ゆえに与えられる教育の限界と未婚女性であることの窮屈さを感じないわけにはいかなかった。彼女は体調の良い時には社会奉仕活動にも携わったが、頻発する神経の高ぶりによる疾患に悩みながら、次兄 Henry や友人との交流にささやかな喜びを見出す生涯を送った。

Henry は1872年、叔母と Alice を伴ってヨーロッパを旅行し、父の遺産における自分の取り分を Alice に譲り、Alice の晩年には彼女をイギリスに

呼び寄せている。James の私生活については、彼自身が自分の情報を後世に残さない工夫をしたこともあり、ヴェールに包まれた部分が多い。最近の James 関する研究としては、斎藤彩世の『境界を持たない愛：ヘンリー・ジェームズ作品における同性愛をめぐって』（松籟社、2019）では James の性的志向の一面について伺うことができる。また、スーザン・E・ガンター編、別府恵子・難波江仁美訳『心ひろき友人たちへ：四人の女性に宛てたヘンリー・ジェームズの手紙』（大阪教育図書、2014）では、James と文学を介した交流をもった人々との私信の一部が伺える。James の私生活や交流関係を掘り起こそうとする研究がある中で、本稿では家族の中でも特に仲の良かった妹 Alice との関係に注目することとする。

旅先の Henry から Alice への手紙では、つねに Alice の健康を気遣う様子が読み取れる。本稿では、Alice が Henry の作品中の人物像や人間関係に与えた影響について、Henry の書簡や Alice の日記をもとに検証していき、それぞれ孤独や人生に対するある種の冷たい視点を持っていたとみられがちな兄妹の別の側面である家族愛あふれる一面を明らかにしていきたい。

I

Henry James にとってアメリカを離れヨーロッパに渡るということは、そこでの新しい経験とアメリカ人の視点から見た異文化観を発信するという、彼の作家生活を通じて繰り返される表現方法の始まりであった。彼が見たヨーロッパの様子は、その作品に表現されるよりも先に、家族に微細にわたって表明されていったと言えよう。まずは Henry が家族や Alice へ宛てた書簡から Henry の文学テーマの萌芽の様子と家族の存在感について考察する。

1869年、26歳で単身ヨーロッパに渡った Henry は、家族や知人に宛てて常に手紙を書き送った。旅先での Henry は、訪れた町の風景や美術館、社

交の場を楽しんだが、彼にとって一番の元気のもととなるのは家族からの手紙であった。1869年5月29日にジェノバより21歳の妹 Alice に宛てた手紙では、“... I have been counting strongly on news from home. I received last week a note from Bob—or rather a letter & a most amiable one. But this week, nothing!” (9)¹とおどけた調子で家族からの便りが無いことに落胆している様子を書き送った。また同年6月19日には、“I could be as homesick as you please” (29) と、書きつつも、“The chief event since my arrival here, is the receipt of a most blessed letter from Willy & a not from father.” (30) と家族からの便りのあるなしが自分にとって重要事項であることを指摘する。家族への手紙の最後では Henry は常に家族のメンバーの健康を気遣い、愛する気持ちを伝えてくれるよう頼む言葉で結んだ。彼の手紙を通して、彼が愛情深い家族の絆の中で生まれた息子であったこと、それゆえに寂しがり屋で甘え上手であった様子がかがえる。このように書簡からは、人生を傍観する孤高の人物を描く傾向のある独身の大作家とみられた Henry James の若き日の家庭的で家族愛を求める一面を読み取ることができる。

また、生涯肉体の病気やヒステリーに悩まされた Alice の健康状態は、いつも Henry の気がかりであった。F.O. Matthiessen によると、Alice が経た病気は、「リウマチ性痛風」「脊髄神経症」「心臓病合併症」「神経性知覚過敏」であり、彼女は最終的に乳癌で生涯を閉じた²。そんな Alice を励まし慰めるために Henry は手紙の中で彼女の健康を願う言葉をよく使った。

たとえば、Henry が単身で渡欧した1873年4月25日イタリアで、Alice からしばらく便りないことに Alice の病状の深刻化を察知する手紙を綴っている。ところがその後 Alice の病状は好転し、同年9月3日には、父母の手紙によって Alice が“very robust”であることや Alice が自分に手紙を書こうとしていることを知り、Henry は嬉しさのあまり Alice の手紙が来る前に返事を書いてしまったと述べている。

さらに Henry がヨーロッパ永住を考えて渡欧した後の1878年6月5日の

手紙では、父母から Alice の具合の悪化を知り、一緒に付き添ってやりたい気持ちを、“...I am sorry to say telling me how very uncomfortable you have been. This has been very sad news to me & has made me wish that I were near you—to ‘sympathize’ with you.” (145) と綴る。また続けて Henry は、兄 William が婚約して家族がお祝いムードに包まれていることについても、Alice の具合が悪いことを軽んじた “inconsiderate” なことであると憤りの気持ちを書き、そこには兄の慶事よりも妹の体調を思う気持ちが強く表れている。

このように Alice の健康状態は Henry や家族の上に重くのしかかる悩みであると同時に、兄妹の青春時代から共有された話題であり、病は Alice の属性となった。病を抱えて生きることを若くして身に付けた人物、そのような人物の人生観は、後年 Henry の創作活動においても意識されるモチーフの萌芽となったと考えられるのである。たとえば、Henry の作家活動における中期の最長編作品 *The Portrait of a Lady* (1881) において、ヒロイン Isabel のいとこである Ralph は「病気であること」を人生の職業としてみるとみなされる。Ralph は Isabel に対して愛情深い彼女と結婚するといった決断に踏み切ることはなく、兄と妹のような継続する家族愛を注ぐのである。Henry は、病と折り合おうと模索する Alice の生き方と、互いに気遣い合う兄と妹の愛を、その作品にさまざまな形で描きこんでいると言える。

さらにアメリカ人としてヨーロッパ社会に住む Henry が手紙の中で頻繁に言及することは、ヨーロッパの国や町の印象、その中にいるアメリカ人の相対的な特徴や価値である。彼は母国アメリカの価値観とヨーロッパのそれとを比較し、この観点は後の彼の小説における国際的モチーフへと結実していくこととなる。1869年6月19日の Alice への手紙では、Henry はヨーロッパにアメリカ人としていることの疎外感を綴り、“I feel helplessly hopelessly American” (31) といった表現を用いる。この手紙の中で、ヨー

ロップ社会にいるアメリカ人の印象を Henry は、“And yet I confess most of the Americans I have met revolt me by their thinness & commonness.” (31) と表現している。この“commonness”という言葉は、Henry の小説 *Daisy Miller* (1878) の中でヨーロッパ人の視点を体現する Winterbourne の叔母が Daisy 一家を“common”と表現する場面を彷彿とさせる。

Henry の人生と関わりの深い町の一つがイギリスのロンドンである。1879年12月21日に9歳年上の友人 Grace Norton に宛てた手紙の中で Henry は、“... it is the place in the world ... in which I feel [^] myself most at home.” (69)³と伝える。また、Henry が明らかに惹かれた町はフランスのパリである。1872年に Henry は母方の Kate 叔母と Alice とともにヨーロッパ旅行をし、パリを訪れ、Alice がうきうきと活動的になっている様子を7月13日の両親への手紙で報告している。加えて Henry が気に入り、頻繁に滞在したのがローマやフィレンツェをはじめとするイタリアの町である。1869年11月7日の Alice への手紙では、彼は自分が歩き回ったローマの町の様子を詳しく報告し、“Rome is still Rome at the end of a week—or rather is more thoroughly Rome than ever.” (171-2) とその存在感の重さを表現している。Henry が手紙の中で披露するヨーロッパの印象を知ることで、後の Henry のさまざまな作品の舞台となるヨーロッパの町の存在意義と効果を見いだすことができよう。Henry のヨーロッパへの旅とその中の Alice の印象は、その後の彼の作品の中で再現されてゆくのである。

II

Henry から Alice への手紙だけでなく、Alice から Henry への手紙も同量残されていれば、二人が影響を受けあう様子を掴みやすいが、残念ながら Alice の手紙は Henry によって他の手紙と同様、大半が燃やされ処分されている。そこで Alice から見た彼女の次兄 Henry の側面を、*The Diary of*

Alice James (1934) から考察してみたい。日記の中で Alice は彼女の人生観や家族の思い出、兄 Henry との楽しい交流などを思うままに書き留めている。

Alice の日記は、彼女がイギリスの Henry 宅近くに移り住んだ後の1889年から1892年の彼女の死の直前までの Alice を取り巻く状況が記されているものである。Alice は Henry を非常に頼りとしており、彼女の死を看取ったのも家族の中では Henry であった。1890年3月25日には、“Henry came on the 10th, and spent the day, Henry the patient, I should call him. Five years ago in November, I crossed the water and suspended myself like an old woman of the sea round is neck where to all appearances I shall remain for all time. I have given him endless care and anxiety but notwithstanding this and the fantastic nature of my troubles I have never seen an impatient look upon his face or heard an unsympathetic or misunderstanding sound cross his lips. . . this last a pitch of brotherly devotion never before approached by the race.” (Alice 104)⁴と述べられる。この部分からは、Henry が Alice のために献身的に動くことに全く負担を感じていないこと、わが身のように Alice を大切にすることが読み取れる。二人が馬の合う相性の良い兄妹である様子が窺える。

この相性の良さゆえに Henry は妹からの助言を受け止め易く、その影響を受け易かった。この様子は、1890年6月9日の日記、“I have this morn [ing] a beautiful letter from Harry of 25 pages in answer to a few lines I wrote to him, after reading the *Great Play*! I was greatly thrilled and touched by the implication which his letter gave that he cared for my opinion as an opinion, —the smallest flatteries of one’s kin outweighing the acclamations of a multitude—these last so familiar to me! (Alice 121)⁵という部分からも読み取れ、Henry が妹のアドバイスや批評を尊重して、受け止めていることが分かる。また、1891年6月17日の日記では Alice は、“H.

[Henry], by the way, has embedded in his pages many pearls fallen from my lips, which he steals in the most unblushing way, saying, simply, that he knew they had been said by the family, so it did not matter.” (*Alice* 212) と記し、Henry の作品の一部に Alice の口から出た表現が取り入れられていることを示している。Alice から直接聞いた言葉はこのように Henry の作品の一部となった可能性がある。

Alice も Henry と同様、アメリカ人であることを意識しつつイギリスに移り住み、イギリスで生涯を閉じた。このような Henry と Alice が持つ価値観には類似する点がある。まず目に留まるのは、両者ともに上流階級意識を明確に持っている点である。Henry が描く人間模様のほとんどは上流階級社会を舞台としており、彼が身を置く社会環境も生涯変わることがなかった。Alice はイギリスの人々の様子をたびたび批評しており、1890年2月13日には自分の世話係りの“Nurse”と呼ばれる女性が、自分の気まぐれに対抗したエピソードを書き、他者から雇われる立場の労働者の生き方について、“Think of being dependent upon the whims of another for bread! And how can we, the *haves*, ever hope to enter remotely into the inspiring motives of the *have-nots*?” (*Alice* 85) と評する。彼女が自らを、“the *haves*” (持っている者) と明確に認識している点が注目に値する。彼女は経済的にも肉体的にも強靱というわけではなかったが、自らを特権階級であると認識する前提の上で、自分の脆弱さを語っていることは見逃せない。彼女の生活は、経済的に豊かではないが、労働する立場になることは決してない。Henry の小説における羽振りの良くない上流階級の人物の境遇にも通底する。

また Henry と同じく、イギリスにいながら自分がイギリス人ではなくアメリカ人であることや、両者の違いについて、Alice は常に意識し、観察する。たとえば、イギリス人の自殺を耳にした際には、彼女が持つイギリスの強いイメージが変貌する。また、“You are so impressed, at first, when you

come by the rounded smoothness of intellectual interchange, and are amazed until an illuminating ray is projected, and you see that you can make no call of any sort upon the individual for a movement of inspiration, that his substance, only in exceptional cases, justifies the surface of inherited education and fortunate opportunity that has fallen to his lot . . .” (Alice 204) (1891年5月9日) という箇所からは、イギリス人に対して Alice が最初に抱いた洗練された印象が失われ、イギリス上流階級にある人物が必ずしも知的上層階級とは一致しないと彼女が認識した様子が読み取れる。一見、立派で確立された、イギリス社会や上流階級にある人々の弱さに Alice が気づいていく様子は、兄 Henry の作品における、一見華麗なヨーロッパ社会に入り、その腐敗や脆弱さに気づいていくアメリカ人の主人公の視点とも通底する。

兄妹に共通する第三の特徴は、人生に対する傍観的視点である。二人とも生涯結婚することはなかったこと、アメリカ人でありながらイギリスで生涯を閉じたことも共通する。日記の中で Alice は結婚や出産という問題について、それらから自らは離れた立場にしながら、たびたび言及している。1889年6月18日には彼女は、五番目の子供が産まれた夫婦の話に言及し、自分が出産経験者ではないゆえの躊躇を見せながらも、その新たな命を、“one more tiny voice to swell the vast human wail rising perpetually to the skies!” (Alice 36) と表現し、新生児の人生が始まることを喜ばしいこととはとらえていない。他人の出産は彼女の厭世的な人生観を再確認する出来事に過ぎない。Alice にとって子供とは、その無邪気さや生命力を愛でるべき存在ではなく、彼女の視点には母性が欠けていると言えよう。このような Alice の子供観は、Henry の作品における大人びた子供たちの人物像とつながる。たとえば、*What Maisie Knew* (1897) における Maisie は、無邪気で愛される子供というよりは、大人から利用されそのエゴの受け皿となると同時に、大人を冷静に観察し、彼らを利用して知識を得る人間の生命力を体

現する。Alice も Henry も、「子供」を無条件の愛や保護が与えられるべき存在とはとらえておらず、未熟さや生きにくさの表象ととらえていると言えよう。

また結婚については、Alice は、イギリスで目にした女性たちの結婚事情をアメリカでのそれと比べ、1890年3月22日の日記では、まさに傍観者としてではあるがイギリス女性が簡単に再婚することに驚く気持ちを記している。重ねて、1891年1月28日にも知人が再婚したがっていることにショックを受けたことを記し、“‘Twould seem to the inexperienced that one happy ‘go’ at marriage would have given the full measure of connubial bliss, and all the chords of maternity have vibrated under the manipulation of six progeny ; but man lives not to assimilate knowledge of the eternal essence of things, and only craves a renewal of sensation.” (Alice 172) と分析する。これらの再婚に関する Alice の記述から、彼女が結婚を不可欠であるとも日常生活であるともとらえず、むしろ非日常的で強い印象や教訓、また、人間の成長をもたらす単発的な経験ととらえていることが読み取れる。それゆえ彼女にとって、一度の結婚で十分結婚の精髓というものを吸収したはずの人が、なぜ再び同じ経験を繰り返そうとするのかが理解しにくいのである。このような Alice の再婚に対する抵抗感は、例えば Henry の短編小説 *The Alter of the Dead* (1895) における、妻を失ってすぐに若い後妻を迎えた友人に対し、非難の目を向ける語り手の気持ちと重なり合う。新たな相手との結婚生活に身を投じ、変化を日常に取り込んでいける人々の人生に対する積極性や異性とかかわりあうエネルギーに、半ばあきれ、自分とは異質な人生であると傍観する視点を、Alice と Henry は共有していたと言えよう。

III

それでは Alice の生き方や価値観の片鱗がうかがえ、Alice の影響を感じ

させるような Henry の小説における人物は誰であるだろうか。

Henry は彼の姪に対して、“Alice’s tragic health was, in a manner, the only solution for her of the practical problem of life.” (Edel 8)⁶と表現した。このような Alice の病気そのものが彼女のアイデンティティーともなっている様子は、先に述べたように Henry の小説 *The Portrait of a Lady* の中で、ヒロイン Isabel の従兄である Ralph の病気が彼の職業でありアイデンティティーとなっていると表現される部分と類似する。Alice はまさに Ralph のように病気によって職業や結婚などの人生の活動から身を引き、他者を傍観する立場にありながら、愛する家族の役に立ちたいと願う。Henry 自身の傍観者的性格と Alice の生き方が、Ralph のような人物像に反映されていると考えられる。

また、結婚することが最もまっとうな女性の「職業」とみなされた時代において、Alice が未婚女性として生きることや、その教養を職業に結び付け難いことへのわだかまりに悶々とする心情は、*The Bostonians* (1886) における Olive が抱くやるせなさやジェンダー意識にも影響を投げかけていると言えよう。

さらに、Henry 自身が大いに気に入った町パリで心躍らせる *The Ambassadors* における Strether の解放感や若返ったような気持ちには、Henry の印象とともに、Alice のパリでの姿も重なる。Henry は、1872年7月13日にパリから両親への手紙に、“During the three days we spent in Paris . . . she[Alice] seemed like a new—like a rejuvenated, creature, and displayed more gaiety, more elasticity, more genuine youth animal spirits than I have ever seen in her.” (43)⁷と報告している。この時、Henry は、母方の Kate 叔母と Alice の三人でパリを訪れた。パリの雰囲気生き生きとして精神的に観光する Alice の姿は、堅苦しいアメリカのニューイングランドからやってきた Strether の解放感と喜びの心情描写を思わせる。

ある時 Henry は単身でヨーロッパを再訪する。その際の1873年2月10日には Alice に宛て、“...I expect again to find myself wishing that you might be bounding at my side.” (210) と、彼女が旅のパートナーであってくれたらうれしい気持ちを漏らす。このように心躍るヨーロッパで、気の合う旅の道連れがたまにいてくれることへの願望が具現化した人物が、*The Ambassadors* における Strether にとっての Maria Gostory とも考えられよう。Maria が未婚の多少裕福な婦人であり、Strether にとって快適な道連れである点が、ともに旅をした時の Henry からみた Alice の存在に通じている。

さらに Henry の小説中によくみられる登場人物の一つは、晩年の Alice と同じくやや中年期の未婚女性である。Alice と Henry の小説中の女性像との関係について、F.O. Matthiessen は、“The secret of her philosophy was not unlike the belief in will that sustained WJ[William James], though the only world in which she could deploy her force was the inner world of HJ’s typical heroines.” (Matthiessen 273) と評する。*The Aspern Papers* (1888) における Tina は、他者との取引を可能にする財産であり、いわば自分の持ち駒である手紙を、その交換価値を味わうことなく、自らの“inner world”にある状態のまま焼き払ってしまう。孤独を受け入れ、自分の内面世界の相対的価値を外部に問うことなく、閉じられた神聖な内面世界を保ったまま生きる Tina の姿に Alice の生き方が重なると考えられる。

Henry は社交界で耳にした小説の萌芽となるエピソードだけでなく、身近な家族の価値観をもその文学に自然に取り込んでいったと言えよう。

結

病を抱えつつ祖国を離れた土地で時に孤独を感じながら生きる Alice にとって、兄 Henry は実に安らぎを与えてくれる存在であった。1890年1月

11日の日記の中で Alice は、“Harry came yesterday and I had as always a happy day with him. I should cry hard for two hours, after he goes, if I could allow myself such luxuries, but tears are undiluted poison!” (Alice 74) と記し、Henry との楽しい時間と彼が帰った後の寂しさを表現している。感情を抑えがちな Alice にとっては、彼女が Henry の来訪に対して抱いた感情は数少ないストレートで率直なものであったと言えよう。Henry は完全に彼女の味方でいてくれる貴重な存在であり、同時に Alice も常に Henry の味方であることが、この日の日記に続けて記される。つまり、Alice の友人が『スクィーカー』誌に掲載されているある評論について、それがひどい文章だから読まないほうが良いと彼女に忠告してくれたのだが、その文章を書いたのが他ならぬ Henry であったゆえに、Alice は友人の方を滑稽な人物であると感じる。作家である Henry の調子が良い時も悪い時も、その良き助言者となり、味方となっていた Alice の一面が読み取れる。

Henry は Alice をはじめ、家族のそれぞれに対して細やかな手紙を書き続けた。彼が幼い頃より家族の強い絆のもとに育ち、若い時代にもたとえ距離が離れても手紙によって彼が家族との良好な関係を保つ努力を続けていた事実を知ることによって、その後の Henry が知人や友人に恵まれて、おおむね彼らと良好な人間関係を築くことができた作家となったことに納得がいく。Henry と Alice の関係も、Henry が一方的に Alice の面倒を見たわけではなく、彼が Alice の存在に大いに励まされていたと言えよう。自分と似た面を持つ妹 Alice の面影は Henry の文学の中で反映され生き続けている。

備考：本稿は第69回日本英文学会九州支部大会でのシンポジウム『Alice との関係を通してみる Henry James の側面—Henry James の書簡と Alice James の日記を通して—』（於：中村学園大学）において口頭発表した原稿に大幅な加筆修正を行ったものである。

註

1. Pierre A. Walker と Greg W. Zacharias 編集による *The Complete Letters of Henry James* のシリーズより。以後、James の書簡からの引用はすべてこのシリーズにより、カッコ内にそのページ数を記す。
2. F.O. Matthiessen の *The James Family* の p. 272 を参照。
3. 表記は原文のまま。
4. Alice James の *The Diary of Alice James* より。以後、Alice James の日記からの引用はすべてこの版により、カッコ内にそのページ数を記す。
5. Alice は日記の中で Henry のことをしばしばその愛称である Harry と表記している。
6. Leon Edel が *The Diary of Alice James* の巻頭に寄せた、“Portrait of Alice James” (1964) より。
7. 表記は原文のまま。

Works Cited

- James, Alice. *The Diary of Alice James*. Ed. Leon Edel. Northeastern University Press, 1999.
- James, Henry. “Daisy Miller.” *Tales of Henry James*. W.W. Norton & Company, 1984.
- . *The Ambassadors*. “A Norton Critical Edition”; W.W. Norton & Company, 1964.
- . *The Aspern Papers*. New Brunswick, Transaction Publishers, 1999.
- . *The Complete Letters of Henry James, 1855-1872*. Eds. Pierre A. Walker and Greg W. Zacharias. University of Nebraska Press, 2 vols., 2006.
- . *The Complete Letters of Henry James, 1872-1876*. Eds. Pierre A. Walker and Greg W. Zacharias. University of Nebraska Press, 3 vols. 2008-2011.
- . *The Complete Letters of Henry James, 1876-1878*. Eds. Pierre A. Walker and Greg W. Zacharias. University of Nebraska Press, 2 vols. 2012.
- . *The Complete Letters of Henry James, 1878-1880*. Eds. Pierre A. Walker and Greg W. Zacharias. University of Nebraska Press, 2 vols. 2014, 2015.
- . *The Golden Bowl*. Vols. XXIII and XXIV of *The Novels and Tales of Henry James*. “New York Edition”; Charles Scribner’s Sons, 1909.
- . *The Portrait of a Lady*. Vols. III and IV of *The Novels and Tales of Henry James*. “New York Edition”; Charles Scribner’s Sons, 1908.

——. *The Spoils of Poynton*. Penguin Books, 1987.

Matthiessen, F.O. *The James Family*. Vintage Books, 1980.